視点

「生活者」の人間的側面

北星学園大学名誉教授　三浦　　収

近年、規制緩和による安全規制の不備に伴い、鉄道事故、マンション耐震強度偽装事件、エレベーター制御システムの不具合ほか等々、不祥事が多発している。端的にいえば、生活者の価値観にある安全、安心、公平、公正、健康、環境などへの配慮が為さすぎたためである。そのあと、再び規制を強化する「揺り戻し法」なるものが国会で承認された。修正は速いに越したことはないが、もっと慎重であるべきである。規制緩和の趣旨は何であったのか。種々の見方はあろうが、大事なことは、明らかに、生活者に対する認識が不十分、否、欠落しているといわざるを得ない。日常、使用されている消費者、生活者の語意をどう理解したらよいのか。両者は、異なるという前提で考えてみる。消費者には、二面的な特徴がみられる。

一つは、経済人として、最小の費用、犠牲を払って最大の効果を意図した合理的行動である。現実には、いつも、その様な行動をとり続けているのではない。買物で人が群がっているのをみて、わけもなく衝動買いをする。

もう一つは、生活人として、満足を得ることが可能なモノやサービスを選好する裁量重視の行動である。しかし、消費者の生活事象（コト）の価値基準とモノとの係わりに変化が生じている。よく見かけることであるが、穴のあいたジーパン姿の若者、なぜ、擦り切れたものに、数万円も出して入手するのか。一種のパズル・ファッション（既成概念に囚われない）といえなくもない。人びとの評価をうけ、認められているのであれば、自分なりに価値観を見出して行動する時代である。

生活者をどうみたらよいのか。日々、人間的側面に立脚して生活価値を創造していく主体。生活者の意識や行動は、そのときどき、状況に応じて変わり、生活者はモノやサービスを消費する存在であることに変わりはない。消費を通じて生命を維持し、生活が持続できて、生活価値（心の豊かさ、ゆとり）を創造し、より高めていくことで自己実現を図り、人間存在の意義を見つけだそうと努力しているのが、生活者であると理解したい。生活の軸になっている人びとの欲求にも、史的変遷がみられる。戦後、モノ不足時代の生存欲求。少し余裕が欲しい、モノを持ちたい所有欲求。人とは違ったモノを持ちたい差別欲求。何か自ら価値をつくり出してみたい創造欲求。小さなことでもよい、自分が自分であることを感じとりたい自己実現欲求など、より高次な生活態様へと進化する。

生活態様の基盤である衣・食・住・遊・学・働の6要素を人びとの健康と環境に有機的に繋ぎ合わせ、持続可能性を志向するライフスタイルを提案したのがLOHAS（Lifestyles Of Health And Sustainability）アメリカで誕生したコンセプトである。以下、日本語読み、ロハスの理念や思想が、今、日本で注目されている。ロハスには、新しい生活価値を創造するための様々な発想や手がかりが提起されていて、大変興味深いものがある。ロハスの生活価値観の狙いは、自分や家族の健康を大事にすることが、最終的に地球という惑星の環境の健康に繋がっていく。同時に、生活者の生活基盤にしっかりと根を下ろしたビジネスモデルを構築すること。21世紀は、ロハスの理念に相応しい北海道の時代を、「北の大地」に定着させたいものである。